
 学 会 記 事

第45回新潟麻醉懇話会

第24回新潟ショックと蘇生・集中治療研究会

日 時 平成9年6月7日(土)

午前10時

会 場 新潟大学医学部

有壬記念館 2階

I. 一 般 演 題

1) 高齢者重症筋無力症患者に対する胸腺腫摘出術の麻醉管理

山田 雅子・馬場 洋 (新潟大学
麻醉学教室)

演者らは、81歳の高齢患者で手術後抜管可能であったが後日筋無力症クラーゼを発症し人工呼吸管理が必要となった症例を経験したが、一方で同型でも術後問題なく経過している症例も経験したため、諸家の提唱している術後の人工呼吸器使用予測のスコアシステムにおける患者の年齢の影響を検討した。【対象と方法】1992年1月1日から1997年5月20日までに新潟大学医学部附属病院にて胸腺摘出術を受けたMG患者37名を対象とした。65歳以上の老年者群(n=11)と64歳以下の若年群(n=26)の2群にわけ、それぞれ術前の状態と術後の人工呼吸器使用の有無を調査し、各種の予測スコアシステムにおいて一致率、false negative, false positiveの確率を計算した。【結果】若年群では一致率77.0~88.5%, false negative 0~13.6%であったのに対し、老年群では一致率72.7%, false negative 16.7~30.0%であり、老年群では予測と結果の不一致が多く認められた。

【結語】術後の人工呼吸器使用予測の各種スコアシステムにおける患者の年齢の影響を検討した。老年者に対してはスコアシステムによる予測は難しい傾向にあり、より慎重な対応が必要と考えられる。

2) 最近5年間の麻醉管理の変遷
— 関連病院アンケート調査をもとに —中山 紀子・傳田 定平 (新潟大学
麻醉学教室)

私達はアンケートにより、新潟大学附属病院及び関連病院13施設の協力のもとで麻醉科管理手術症例について1992年から1996年までの5年間の麻醉管理法の実態を調査した。

それによると麻醉科管理手術症例中、全身麻醉の比率は減少傾向にあり、脊椎麻醉、硬膜外麻醉の増加傾向が見られた。全身麻醉症例では吸入麻醉薬によるものが大部分であり、ハロセン、エンフルランはわずかに使用されるのみで、イソフルラン、セボフルランが主流を占めている。プロポフォール発売に伴い、1996年には新しい麻醉法として出現した。また、大学病院は関連病院に対し、全身麻醉症例が多く、脊椎麻醉、硬膜外麻醉の割合が少ない。また、1才未満の麻醉、長時間の麻醉が多かった。

3) 胸部食道癌手術(3領域郭清)の麻醉管理

若井 綾子・傳田 定平 (新潟大学麻醉科)
佐藤 一範・渡辺 逸平 (同 集中治療部)

開胸開腹食道切除術は、プラントの手術に比して術後長期人工呼吸管理を必要とし、侵襲が大きい。今回私たちは開胸開腹食道切除術の、2領域郭清群と3領域郭清群における術中術後管理について比較した。術中管理については、手術時間、出血量、輸液量、尿量、手術終了時のCVP、Oxygen Index、術中不整脈の有無について比較したところ、手術時間と、出血量にのみ有意差を認めた。術後管理については、人工呼吸管理期間、上室性頻脈発作の有無、SIRS状態の有無について比較したところ両群間に差はなかった。術前の呼吸機能や栄養状態など、より正確な患者の術前状態を加味すれば有意差がでたかもしれない。両群とも長期人工呼吸管理を必要とし、高率にSIRS状態になることから、非常に侵襲の大きな手術であることが解った。